

高校異聞

ご学友という程のものではないにしても、小学校、中学校、高校、大学、それぞれに同級生や友人がいた筈である。最近は大学院にもあてはまるのかも知れない。一体、それらの学友の中で、年を重ねてからも交友を続けて行けるのはどのくらいの割合、いるのだろうか。

自分の場合、小学校から高校までは、公立学校だった。小学校と中学校は地元の区立だったので、近所のほとんどの子供達がそのまま入学した。つまり、子供達の構成は、社会の縮図よろしく、大人社会同様に様々な種類・階層・種別にまたがり、あるいはこれらがそのまま反映していた。混沌とした社会に統一性、結びつきがないように、また年齢が低く、友情を育てるには未熟だった分、大人になってからの交流には中々結びつかない。

義務教育が終了すると、高校は意識的に選択しなければならないので、高校の同窓生は、意識的にその高校を選択した者の集まりということになる。選択のフィルターによって選り分けられた集団である。

自分の場合は、都立高で初めての学校群制度が導入され、その1期生ということで、若干、色合いが異なるが。

学校をいくつかまとめて群を作り、この群の入試に合格すると、群に属するどこかの学校に機械的に配分されるという新型入試だった。この群制度は、何度か制度をいじった挙げ句、不人気で弊害が大きかったためか、現在は廃止されている。さらにはその反動か、学区までなくなったという。

自分が受験した61群は、両国・墨田川・小松川の組み合わせ。その結果、それまで全く知らなかった墨田川高校に配分された。

このような特殊性はあったが、小学校や中学校のときと比べると、学友集団は、社会的にはより近い種類の集団になっている。試験があるので、知的レベルがある程度、平準化されている。とはいっても、普通高校なので、理科系・文化系・体育会系？など、当時の志望は様々である。

ここから大学に進学すると、更にスクリーニングされるので、付き合いはより深まりそうだが、自分の場合は、それ程でもない。大学生は、既に成人し行動範囲も広がっていたので、大学の枠にこだわる必要がなくなっていたからかも知れ

ない。その頃の友人は司法試験の受験生仲間だったから、そのまま同業者になってしまったためでもある。

だから、学生時代の同期生らと、学友として交友することは、最近まで、ほとんどなくなっていた。

ところが、50を過ぎた頃、突然、高校の同期会が開かれるようになった。マメに幹事役を引き受けてくれる人がいさえすれば、長年月が経過した同期会などでも、簡単に開催できるものだということが、出席して分かった。これが数年おきに開催されるようになるとともに、メールの《全員に返信》の機能を使った事実上のメーリングリストまで作られ、日常的にさまざまな会話をするようになった。七高掲示板という愛称までついていた。《全員に返信》機能は、メーリングリストのように管理者が要らなくて便利である。

高校の同期なので、進出先のジャンルはさまざまである。会社員や自営業が多いのは当然として、医者も公認会計士も大学教授もいるし、大手IT企業の常務や大手メーカーの役員になった者もいる。変わり種では歌手のボイストレーナー、ジャンボジェットのパイロット、僧侶、書道家、俳人、脚本家などもある。土曜ワイド劇場『法医学教室の事件ファイル』や『火災調査官』シリーズを書いている今井詔二氏は同級生である。七高掲示板を使って、法医学教室に関しては、刑事関係で何度か質問されたりもした。それぞれのジャンルが違っているので、飽きが来ない。新しい発見があった。

この同期会では、七高掲示板を使ってさまざまなサークルもどきも作られた。毎月ネット上で俳句の会が開催された外、山登りの会、旅行の会、本の交換会、ゴルフコンペ、テニス練習会、スキーツアー、お花見、適宜の呑み会などが催されてきた。参加は自由である。自分のようにランニングを始める者も現れ、東京マラソン出走者の応援イベントを持ったり、千葉・青葉の森のリレーマラソンに仲間に出場したこともあった。

互いの呼び名は、高校時代のまま。同級生だった者同士は、互いに呼び捨てである。同級生になったことがなかった者同士も、最初は遠慮していても直ぐに周りに合わせて呼び捨てになった。

還暦を過ぎ、卒業から30年、40年以上を経過して、再び、高校時代の仲間が日常生活に登場している絵は、若干、不思議ではある。



このような高校同期とは別に、昨年、高校演劇部時代の先輩らと、劇団を復活させた。チラシには、『43年ぶりの復活公演』と銘打った。43年前まで、公演をしていたのだ。

実は高校時代、演劇部にも所属していた。

同期の演劇部員も男女多数いたが、なぜか、同期で自分だけ3学年先輩の元演劇部員の卒業生らとつきあっていた。受験準備のため高校3年生は部活動に出なくなるが、自分だけ、卒業した先輩らと芝居の練習。学校の外での公演に参加していた。受験に失敗したのも当然かもしれない。

世は70年安保闘争、学生運動やゲバルト真っ盛りの時代であったが、大学に入っても、しばらく自分は劇団活動を続けた。

その後、互いに若かったこともあり、原因は今でもよく覚えていないが、何となく衝突するようになって、劇団は解散。というか、自然消滅のようになって活動休止。その後、自分も司法試験に転身した。

高校演劇部の3年先輩、その前後の代には、プロの劇団に入る者、NHKに入る者、演劇の音響の専門家になって現在も演劇界を牽引している者など、演劇に対する取り組み方が、自分の同期の演劇部員らとは異なった人たちがいた。当時は、そんな雰囲気惹かれていたのだ。一時は、自分も何となく演劇の道に進もうかなどと考えていたこともあったのだが。

解散後は、それぞれが別々の道に進み、年賀状くらいしか交流がなくなってしまう。それぞれがどのような仕事をしているのかすら、互いに良くは分からなくなっていた。そして、それから40年以上が経過した。

一昨年春、突然、久しぶりに集まろうとの手紙が、3つ年上から届いた。迷いもなかった訳ではないが、集合場所の新宿の店に行ってみた。風体は変わっていたが、知った顔が並んでいた。40年以上が経っていた。学生時代から、一挙に還暦に飛んでしまったのである。紅顔の少年少女が、白髪頭で集合していた。正に、玉手箱が開けられたようであった。昔の確執などは、どこかに飛んでしまっていた。

で、また芝居をしようという話になったのである。

何回か、集まりを持つ間に、やはりオリジナルをやるべきなのではないかとい

う話になった。実は、座付き作家が、既にシナリオを書き上げていたことが後で分かった。オリジナルをという話になるまで、遠慮して言い出そうとしなかったのだ。40年前にも、彼はオリジナルのシナリオを何本か書いていた。

こうしてその後、じっくり1年以上をかけて準備した公演が、2014年10月29日に、たった一晩だけ行われた。東京・日暮里のd-倉庫という変な名前の小劇場である。100人しか入らないところに、更に椅子などを加えて113席。ギュウギュウ詰めになってしまった。遠くまでお越しいただいた諸氏には、心から御礼申し上げます。

題名は、『右から3つめのベンチ』。

公立中学校の社会科の教師を定年退職した後、公立図書館に嘱託員として勤務することになった男の物語。その図書館には合理化で採用された派遣労働者も働いていて、正規労働者と三層の労働社会があった。同じく働く者同士が雇用形態で分断され、非人間的な労働環境に置かれる。さらに公園には家に住めない人々がいて、翻れば、社会には様々な差別や階層が溢れていること……。まあ、そんなことを訴えていた。

自分は、嘱託員や派遣労働者をいじめる正規職員の係長役。真剣に取り組めば取り組むほど、人格を疑われそうな役柄で、困った。

練習が始まってまもなく、この公演を知った我が事務所の陶山嘉代弁護士が自分もやりたいと手を挙げてくれた。すかさず座付き作家が脚本を組み直して陶山さんの役を作った。

陶山さんも、高校時代、演劇部に所属していたことを知っていた。外にも当事務所には、鈴木守という大学の劇団出身の弁護士もいる。会務情報に、自分と同じ高校出身の函館弁護士会の前田健三弁護士が素人芝居にハマっているという話を書いたが(2014年11月号「人権大会の思い出」)、弁護士には、結構、芝居好きが多いのかも知れない。

何よりも、主尋問は周到に作られた芝居そのものであるし、反対尋問は、筋書きのない大芝居である。弁護士ほど、役者に近い職業はないのかも知れない。

結局、陶山さんは派遣労働者役。自分は心ならずも陶山さんをいびることになった(涙)。

この『右から3つめのベンチ』の音響担当は、第一線で活躍中の演劇音響家で

大学の講師もしているバリバリの現役。劇場の音響設計に携わるほか、最近では、永井愛・二兎舎の『兄帰る』『鷗外の怪談』、串田和美演出「K. テンペスト」（まつもと市民芸術館）などの芝居の音響担当に忙しい。

照明は、劇場の支配人をしている元劇団民藝の役者だった仲間が、仕事上の先輩を呼んできてくれた。表方は、韓国ドラマ『Dr. JIN』（大沢たかおと綾瀬はるか）の『JIN-仁』の韓国版）で王族の長老役の女性の吹き替えを担当した声優。いずれも3つ上の先輩である。これらのスタッフに脇を固めてもらって、43年ぶりに立った舞台の出来は、どうだったろうか。

高校の同期は、今でも呼び捨てで呼び合っていると書いたが、演劇部の先輩との関係では、互いに、今でも君付けである。40年前と同じである。ニックネームが付いている者は、今でもそのままニックネームで呼んでいる。つまり、昔の仲間は、どうしても当時できあがった人間関係をそのまま平行移動させてしまう。その象徴が呼び名なのである。

さて、復活公演から3ヶ月が経ち、次回作の練習が始まった。今度は老人性認知症という、誰もが避けて通れない問題がテーマである。座付き作家が、練習の合間に、こっそり次回作まで書いていた。読んでみると、結構、マジで怖い。そんな変な気持ちにさせる脚本である。次回は、少し欲張って、2回公演を予定している。

前回観に来てくれた人たちは、多分に『43年ぶりの復活公演』のご祝儀だったので、次回はこれは通用しない。果たして観てもらえるのか。

前回の練習の際も、今回の練習の際も、互いの仕事や生活の話は、どこかに置いたままである。するのは芝居の話だけ。そういえば、40年前の芝居の頃も、芝居だけで繋がっていた。40年が経っても、取り戻したのは、昔のような一途な、変な情熱である。

幕

（千葉県弁護士会会報『楨』2015. 3発行所収）